

第2版の序

2009年に本書の初版を上市してから早くも3年半が過ぎ去った。幸いにも本書は好評をもって世に迎えられ、増刷を重ねることができた。しかし、医学・薬学の進歩は速く、その間にも数多くの新薬が市場に登場し、それに呼応して各種疾患のガイドラインも更新されたのである。著者らはこのような変化を眺めるにつけ、本書の記述内容が学生の薬物治療学習や一般の薬剤師の業務において、早晚現実の薬物治療と齟齬を生じる可能性を憂慮しはじめていた。

しかし、嬉しいことに羊土社から本書を全面的に改訂する提案を受け、編集者と執筆者は喜んでその提案を受け入れた。初版が世に出てからこれまでに6年制薬学教育の最初の卒業生が巣立ち、社会で活躍をはじめている。臨床薬剤師の教育は大学内での教育から卒後教育を含む新たなステージに入ったと言える。改訂にあたっては内容的に大きな加筆が行われたが編集方針は初版から変わってはいない。数多くの症例の薬物治療と解説を学ぶことで、患者の病態を診療録と臨床検査値から読みとり、知識として習得した薬理学や薬物動態を目前の患者の薬物治療に活かす能力を身につけるのが本書の目的である。本書は薬物治療学を学ぶ学生に加えて、新しい薬物治療を学ぶ臨床薬剤師にも有用であるだろう。

初版の序でも述べたが、本書は薬理学や薬物治療学の系統的な教科書ではない。臨床薬剤師教育の観点から執筆者が創作した症例の集積である。そこには薬物治療上のtipsやpearlがちりばめてある。一通り薬理学や薬物治療学の系統講義を受けた後に症例解析演習などで実践的薬物治療を学ぶ学生に最も有用であろうが、薬剤師が病院や薬局で遭遇した疾患をより深く知るための自主学習にも有用であるだろう。

初版が世に出た時よりもいっそう医療は制度と運用のレベルで緊迫感を加えている。医療保険制度の改訂や医師不足を打開するために新設医学部設置の動きもある。しかし、薬物治療の質的充実と患者の治療上の満足度を向上させるために最も速効性がある手立ては、薬剤師のより深い薬物治療への関与と責任の分担にあると筆者らは考えている。これからの薬剤師は薬物治療において最前線に立ち、医師の力強いパートナーとなり、患者の信頼できる擁護者であるとともにリスク管理者としての役割を求められている。本書がそのような薬剤師を育成する薬物治療教育に役立つことを祈念して第2版を世に送り出すことにしよう。

2013年11月

執筆者を代表して
明治薬科大学薬物治療学
越前 宏俊